
やりっぱなし短編集

T m

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やりっぱなし短編集

【Nコード】

N3338N

【作者名】

Tm

【あらすじ】

読みたいけど書き続ける自信が無いので短編にしちゃったお話を投下するところです。作者の偏った趣味がまるわかり。やりっぱなしなので続きませんが一応一話完結として仕上げてあります。お暇潰しに是非つまんでやってください。

現在三話

【王妃様と僕 異世界トリップ / 小姓×王妃】

【激烈毒舌乙女、甘いものを拒絶する！ 異世界トリップ / ファーストキス喪失】

【アモルの矛先 異世界トリップ 'B L'の橋渡し？】
気まぐれ更新です。

王妃様と僕 【異世界トリップ 小姓×王妃】（前書き）

要は主人公が王妃様の下僕として地味に頑張る様を読みたいという話。

王妃様と僕 【異世界トリップ 小姓×王妃】

運命など、無い。誰某に決められた物事など、感知できなければ
そうとは言い切れないし、できたところでそれはただの決まりごと
ではない。

そもそも運命とは何なのだろうか。ドラマティック、陳腐、付加
価値。それ以上の意味などあるのだろうか。例えばそれが抗うこと
のできない決定事項だとして、されど決めることに何の意味がある
のだろう。抗うことに、何の意味があるのだろう。それによって、
誰が、何が、どういった対価を手に入れるのだろう。

そしてそれはそんな風にして他者を縛り付けてしまうほどの価値
が、本当にあるのだろうか。誰も知らない。きっと、誰も、知りえ
ない。

見渡す限りの青葉が萌える、丘陵。更にその向こうには鬱蒼と生
い茂る青々とした林が連なり、空を仰げば立派な入道雲と燦燦と輝
く太陽とが寄り添うようにしてそこにある。そんなありふれた一枚
の絵画の一面のような光景の最中に、その花はあった。いや花じゃ
ない。だっ広いつばの帽子を被り、白いレースに覆われたドレス
を手のつま先まですっぽりと覆う彼女のその純白の姿は一輪の風に
たなびくすずらんみたいで、けれど彼女は花ではなかった。

彼女は花じゃない。彼女は僕の ご主人様。

「暑いわ、かなた」

立っているだけでも汗の滲む、それこそうだるような猛暑の最中、
それはそうだろうと思わせるようないでたちの彼女は言った。声音
だけはひどく涼しそうだけど、でも僕は特に反論もせず頷く。

「はい、王妃様」

異国から取り寄せたという片手で仰ぐには難しいほど大きなその扇を両手でしっかりと持ち、彼女の斜め後ろから強すぎない程度に扇いでやる。勿論彼女は何も言わないけれど、斜め後ろから垣間見えるその面差しは気持ち良さそうに目を細め、どこか遠くを見つめていた。そんな彼女を見ていたくて、止めろといわれるまで扇いでいよう、そんな気持ちが起る。

現金なものと、自分でも思う。最初はこんな女の命令をどうしてこの僕が聞いてやらなきゃいけないんだ、とよくよく憤慨しては彼女の侍女にたしなめられたものだ。それがいまや、こう。時の流れとは恐ろしい。奉仕にやりがいを見出してしまうなんて。一体僕はいつからこんな従順な詰まらない人間になってしまったのだろうか。それとも最初から、いや或いはこの僕の本質そのものがこうであつたと。

いやいやいやいやありえない。あつてたまるものか。僕は犬じゃないぞ。

「うふふ」

頬をさらりと撫でるような、柔らかい笑い声。見ればいつのまにか彼女がこちらに振り返り、口元に手を当て綻んでいた。何事かと怪訝な目を向けてみれば、年頃にそぐわない悪戯を思いついた少女のような瞳が見つめ返してくる。

「かなた、可笑しいわ。貴方の百面相」

言いながらまた「うふふ」と擦ったそうに笑う。そんな彼女を見て不思議と胸のうちのどこかがうずくものだから、不本意ながらもどきまぎしてしまう。

大体、この人、なんなんだよ。それが大人の女のする顔か？ そんな女の子みたいな顔して、無防備に笑うんだ。歳は幾つだったっけか？ ああ、そうだ二十歳、二十歳だ。僕と四歳も違う。僕からしてみれば、いや世間的な目から言ってももう立派な大人だ。大人の、はずなんだ。それなのになんでこう、瞬きしたら霞むんじゃない

いだろつかと思えるほど、儂く笑うんだ。その度に僕はなんともいえない気分になるって言うのに、解っているのかこの人は。解っていないんなら、なあ、それって大人っていえるのか？ 大人って、まだ、そうなのか？ そういうもののなのか？

僕にはわからない。まだ子供の僕には、一つたりとも、解るっていえるものが無い、んだ。僕にはそれがとつても歯がゆくって、たまらないんだよ。胸の奥がむず痒くって、でも届かなくなつて、たまらないんだ。たまらない気持ちに、なるんだよ。 ねえ、王妃様。

そうだったのは、今と同じような八月初旬。切ない蝉時雨に囲まれ、ギンギンに冷えた冷房の中で夏期講習を終え、うだるような暑さの中帰路についていた。そういう時。息苦しい暑さと灼熱の太陽から降り注ぐ忌々しい日差しに耐えながら一歩また一歩と燃えるアスファルトの上を突き進んでいたとき、それは見えた。

陽炎。揺らぐその光景の中で一瞬垣間見えたその先にいたのは、時代錯誤な貴婦人。真っ白なドレスに白い日傘、クリーム色にたなびく髪。目の錯覚かと頭を振り再び顔を上げたとき、僕は居た。そう、その貴婦人の目の前に。すずらんのように儂く佇む彼女を目の前にして、僕は見知らぬ土地に呆然と立っていた。

それからもう、意味が解らないことの連続だった。少女のようににはしゃぐ彼女に連れられ御伽噺の中でしか存在しないような城に連れられ、妙な格好をさせられ、「お前は今日からわたくしの小姓よ」などと台詞だけ聞いたたら高飛車もいいところな宣言をうつとりと告げられ、有限実行その通りに教育され早一年。今ココ。

彼女の立場は王妃様らしく、そのとんでもない権限によって僕は多くの人が望む地位にまんまと納まり三食宿付にありつけたってわけだ。

最初は本当に意味がわからなくて、頭のおかしい外国人の女に拉

致されたと本気で思っていた。だってありえないだろう。この僕が、小姓の衣装だとは言え、白タイツを履かされることになるなんて！ すごく気持ち悪かった。特に股が。幸いその上に更に半ズボンのようなものを履かされたからもちりは回避されたものの、その過程といったら間抜けなことこの上ない。同級生に見られたら終生からかわれる事請け合いだろう。冗談じゃない。僕にだって男の面子というものがある。

それを、それをだ。あの人は解っていないんだ。屈辱的な格好をさせられた僕を前にしてあるうことか「まあカワイイ」だって。可愛い。可愛いだと？ 男に向かってあるうことか『可愛い』！ そこでもって鉄の鎖より頑強だと自負する僕の自制心も日ごろの鬱憤もあり盛大な音を立ててぶち切れてしまい、僕は果敢にも王妃である彼女に向かって「ふざけるな！」と怒鳴ってしまった。まあ、もちろん、それで済むはずもなく周囲の侍女と騎士達にお前がふざけるなど鉄拳制裁をこれでもかと食らったのは数ある苦い思い出のうちの一つ。

そんなようなことを繰り返し、今に至る、僕。大人しくなるのだって、そうさ、これは所謂処世術。また一步僕が大人に近付いた証拠だ。そう思えば、うん、まあ、仕方ないというか、なんというか劣悪な待遇というわけでもなし、この格好さえ我慢していれば寧ろありったけの幸運に恵まれているといっても違いはない。

なんてったってこんなわけのわからない状態でさえ五体満足、精神的にも、まあリラックスとまではいかなくともそれほど苦にも思っていない。今のところは。病気もしていないし、仕事もこの一年で漸く一通りのことは覚えた。時々からかわれたりはするけれど侍女さんたちもそう悪い人はいないし、騎士さんたちにいたってはまるで弟分のように僕を可愛がってくれる。何より男の憧れ、剣の修行ができるんだから、ものは考えようだ。わりとエンジョイしてるじゃないか僕、うん。

ただ、でも、憂いがあるとすれば数ある中から最たるものを上げ

ると一つ。一つだけ。

王妃様。

彼女を一年間ずっと近くで見してきた。そんな彼女がなにかを憂いている。それに気付いたのが本当に、ごく最近のことなんだ。

確かに、彼女には憂いがあった。いや、彼女自身の憂いというか、むしろ周囲の懸念があった。それはほんの些細な一枚の葉ずれの音から木々のざわめきに発展するかのように、いつも不特定多数の声として彼女の耳に届いていた。例えばそれを彼女が煩わしいと少しでも感じていたらならそれは間違いなく憂いと取れる。

そうだ。その起因そのものが憂いなのかどうかなど、ただの前提でしかないんだ。

ある日彼女は僕にこう言った。

「ねえ、かなた。貴方も、わたくしを可哀相だと思ってくれる？」
その日はひどく陰鬱とした雲が空に立ち込めていて、今にも降りそうな空模様だった。いつもの丘陵に見える、彼方の林はそのさざめきの音が聞こえてきそうなほどゆらゆらと風に揺られ、何故だかとても不気味な様に僕の目には映った。

そんな最中にいつも通りお茶の用意をさせた彼女は何故か僕以外の人間を人払いさせ、どこか遠くを見つめながらそんな事を問いかけてきた。

正直、困った。王妃様がなんの事を言っているのか、僕には解つたからだ。彼女は王妃様だ。でもそれは名ばかりの王妃様だと、みんな言っている。何故かってそれは、口にするのも恐れ多いことなのだそうだけれど、王妃様は未だ純白だから、だそうで。口にするのも恐れ多いとわななくその誰かの唇が能弁に語るには、王妃様はこの国に嫁いで三年なのだという。

そのとき僕は、「へえ、王妃様は十七歳のときに嫁いできたんだ。今の僕と一歳しか変わらないじゃないか。大変だなあ」などと他人事もいいとこな感想を抱いていた、のだけれど。

その話にはまだ続きがあつて、なんでも王妃様はその三年間、つまり今までずっと、王様に召されたことが未だ一度としてないんだとか。

召されるってなに？ と僕が聞くと、彼らはなんだかあまり気持ちのよくない薄ら笑いで、それが夜に王様のお相手をする事、つまり子作りのことだということを教えてくれた。なんだか僕はそれに興奮するよりも妙な嫌悪感を覚えてしまった。まだ見ぬ王様にでも、王妃様にでもない。そんな話を、つまりは、下卑た顔で自覚もなしににやにやと語るその人たちの表情、その人たちそのものにこそ、なにやら気持ちの悪い感情を抱いた。

けれどその人たちは僕のそんな感情に気づくこともなく、それどころかどこをどう勘違いしたのかもつと話を聞きたがつてしていると解釈して、聞きもしないことをぺらぺらと惜しげもなく語ってくれた。

王妃様は純潔なこと。王様は王妃様に興味が無いこと。特に不能というわけでもなく側室、つまり愛人はいること。子供はまだ一人も生まれていないこと。王妃様は世継ぎをと周りにプレッシャーをかけられているということ。王妃様は純潔だから嫁いで以来白い服しかお召しにならないという噂。王妃様は実はとんでもない淫乱だという噂。王妃様は母国で散々男盛りのついた方だったため王様が嫌悪して一度もお召しにならないのだ、という噂。

僕はそこまで聞いて席を辞した後、その足で信頼する先輩の騎士様のところへ向かい、その後半の話を余すことなく白状した。その騎士様は真っ赤になって憤慨しどこかに行ってしまったので、その後のことは僕は知らない。大して興味も無い。

ただそれには問題があつた。この話はここでもまだ、終わってはいなかった。

王妃様が、僕らの会話を聞いていたそうだ。通りすがりだったの

か、それとも何かしらの故意によるものだったのか、それは知らない。けれど王妃様は確かに聞いていて、そしてその直後にこうして僕一人を残してこんな事を言ってきた。なんの事を聞かれているかなんて、解らないほうがおかしい。

けれど、ああ、どうしたものか。僕はどうしたらいいんだ。返答を間違えれば、この仕事を下ろされてしまうかもしれない。いや、それだけならまだいい。よくてクビ、悪ければ王宮追放で衣食住を失い、もっと悪ければ国外追放で寄る辺を失い、更にもっと悪ければ侮辱罪を問われて命を失う羽目になるかもしれない。もしくは既にその中のどれかは決定事項かもしれない。

ああなんてこった。こんなことになるなんて。まさか「僕は知らなかったんです！ 王妃様の悪口なんて言ってますん！」なんて言えるわけが無い。聞かれてもいないことに勝手に答えるなど、この一年で散々叩き込まれた。それに、聞かれたことにはすぐに答える、とも。嘘も言っではいけない。誤魔化しも許されない。

ああ神様、僕はどうしたらいいんだ。一体全体なんて答えれば、彼女は満足して全てのことを僕に限って不問に処してくれるのだらう。

大体僕は本当に関係ないんだ。王妃様の噂がどうか王様がどうか可哀相だ何だって言われたところで聞かれたところでどう答えるって言うんだ。なんて言えば満足なんだ。どう思えば満足なんだよ。知らないよそんなこと。真偽がどうでもよければ真相もどうでもいい。僕はただなるべく平穏かつ楽に過ごしてそこそこいい思いをしたいだけだ。野心なんて無い、良心的で純朴な小姓じゃないか。

なにが気に入らないんだよ。紅茶の入ったカップをソーサーに置くととき手が震えてカチカチ音がすることか？ それとも王妃様がなにか言ったびにいちいち顔を伺ってしまう事か？ しょうがないじゃん、紅茶零したらもつと怒られるし、大体王妃様何考えてるかわかんないから話しかけられるといちいちびびっちゃうんだよ。こ

れの何が悪いってんだ。悪口なんかよりずっと可愛いもんじゃないか。ああもう、どうしろってんだ！

「かなた」

「はいっ」

早く答えろ、と無言の圧力を感じる。実際には王妃様はいつものように、けれどいつもとは違う陰鬱とした光景を眺めているから、斜めに控えている僕に王妃様がどんな顔をしているかなんてわからない。でも早く答えなくちゃ。答えないと不味い。

なんでもいいんだ、とにかくなんかよさげなこと。いや違うよくなくてもいいから悪くないこと。悪いってどんなことだ？ 王妃様が淫乱呼ばわりされてること？ それだ！ それ以外、それ以外だっ。よし言え！

「かつ、かわいそうだと思う人が……ええーと、かわいそうなんじやあないでしょおーかつ」

マイガッ。何を言っとなるんだこの口は。

案の定王妃様は意味がわからなかったらしく、珍しくも僕に振り返りきよんとした目を向けてくる。その表情がまるで少女みたいだ、とパニクる僕の頭がそんな事を考えた。

いや違う待て待て待て、主と直接目を合わせて会話しちゃいけないだった。目を伏せる目を！

「かなた？」

「……はいっ、はい、あの、はい、いえ、ちがくて、えーっと」

うぐあああ。落ち着け僕っ。駄目だ考えがまとまらないってか何も考えられない。ひいひいお助けえ。

「あのっ、えーっと、ですねえ……」

「ええ、なに？」

「お、王妃様は、ご自身が可哀相だと、思っていらっしやるのかなーって」

おーのー。何を言っとなるんだパート？。

なにやら変な汗まで出てくる始末で、じっとり汗ばんだ両手を握

ったり離したり、僕の意味を表したように忙しい。次に続く言葉を失ってあわあわと目を泳がせている僕。

しかし不意に、風が吹いた。ふんわりと、花の匂いの乗った、けれど生暖かく湿った風。まるで雨が降る直前に吹く風のような不穏な心地のする風。

それが僕の頬を掠め、僕が顔を上げるか否かというそのとき、僕の頭に固い何かが触れる。扇子だ。王妃様がいつも、片時も離さず、けれど一度として開いたことの無い扇子。それが僕の頭に、まるで風に誘われたように、すっと当てられた。王妃様が僕を真っ直ぐに見ている。彼女の美しい、けれどどこか空恐ろしいものを感じるその新緑の瞳が、僕を写していた。

「わたくしが、わたくしを可哀相、ですって？」

ぞつと、した。

おかしな話だろう。力で言えば、例え僕が成人していなくとも、彼女が僕に敵うはずも無い。それに危害を加えようとする気配も無い。それなのに彼女のその真っ直ぐすぎる眼差しに当てられたとき、身体中に張り巡らされた血管が凍った。そんな心地がしたんだ。

きつと、返答を間違えば僕の想像よりも遥かに最悪な末路を迎えることになるだろう。そのとき感じた畏怖によって、そんな直感が僕の中にもたらされる。最早冷や汗すら出てこない。儀礼的な話ではなく、今の彼女にこそ、嘘や誤魔化しは利かない。僕は僕の答えを告げることしか、許されてはいないんだ。

覚悟を決めるため、両手をぎゅつと痛いほど、握り締めた。

「僕は……僕は正直、王妃様が可哀相かどうか、わかりません」

扇子はまだ、引かない。この言葉だけではまだ足りないのだろう。喉が震えないよう、しっかりと慎重に、息を吸う。雨は、降ってしまっただろうか。

「僕には、誰かが可哀相だとか可哀相じゃないとか、考えている余裕が、ないんです。だから思うか思わないかで言えば、そういう意味で……王妃様を可哀相だとは思えません」

これは、本当のことだ。だって、自分で精一杯だよ。どうしてこんな状況で、こんな右も左もまだ手探りのこの状態で、誰かを可哀相だなんて思う余裕が出てくるだろう。

もつと本音を言えば知ったこつちやないという話だ。今の僕の真実といえば今すぐ自分の部屋にすつ飛んで帰り、ご飯を食べて腹を満たしてすぐに安らかな眠りにつきたい。それから余力があれば起きてから風呂に入り、のんびりとした休暇を過ごしたい。そんなものだ。

それを今こんな身の毛もよだつような威圧感を僕に向かって放っている彼女に解れなんて、天地がひっくり返っても無理だろうけど。

でも。

「そう」

どこか、ほっとしたようにそれだけ呟いた彼女は、何か思うように目を逸らした。それと共に頤に当てられていた扇子も外され、そして彼女はまたいつものようにいつもの景色に目を向ける。ほっとしたのは僕も同じだったけど、ここで息をつくほど馬鹿でもない。

王妃様の出方をどきどきしながら待っていると、王妃様は顔を逸らしたままポツリと呟いた。

「可哀相だと思われるわたくしは可哀相なのかと、思っていたの」

『思ってくれる？』と聞いたくせに、その言い方だとまるで可哀相だと思われたくないみたいじゃあないか。どっちなんだと内心げんなりしつつ、僕はじつと黙った。多分、王妃様は僕なんかの相槌なんて、必要ないんだろう。いつだって勝手に喋って勝手に笑って。

そういえば今日は、笑っていないな。天気が悪いせいだろうか。相変わらず空はどんよりしてるけど、風は止んだようだ。なんだ、きまぐれな天気め。降るなら降るで土砂降りにでもなっこの状況を打開、もとい有耶無耶にでもしてくれればいいものを。

そんなようなことをごちゃごちゃ考えていると、案の定王妃様は

また勝手に呟く。

「早く世継ぎを、ですって。このわたくしによ？　どうしろというのかしら。おかしいことを言うのよね」

なんだかそれがとても面白おかしそうに言いながら、けれど王妃様は僕の方を向かずにつつと彼方を眺めて言った。というか、面白おかしいんじゃないのかもしれない。面白くなんかないことだ。だったらこれは、そうだ、自嘲　　というやつか。自分で自分を笑う。

そうか。これは僕にだって解る。王妃様は面白くなんて、ないんだ。

「つまらないなら笑わないでください」

しまった、と思いながらも、不思議と驚きは無い。それどころか僕の口は躊躇うことなくつらつら動き出す。

「僕は王妃様が可哀相かどうか解りません。でも王妃様がご自身を可哀相なのだと思っておられるのだとしたら、それは可哀相なことなのだと僕は思います」

まるで読書感想文かなにかのように、抑揚なくつらつら語る僕の口。魔法にでもかかったみたいだ。相変わらず心臓はばくばく胸打っているというのに、一向に止める気になれないなんて。王妃様が細かい声で「なぜ」と呟いた今でさえ、まだ止まる気配は無い。

「自分を可哀相だと思うということは、そう思ってしまうほど、それほど辛いのかなって。だったらそういう人ほど可哀相なんじゃないかなって、僕は思います。でも」

でも。僕は。

そよそよ揺れる、クリーム色の綺麗な髪。綻ぶ口元。ささやかに細められる、新緑の瞳。純白に包まれた、ずらんみたいなあなた。「いつも、笑っているときの王妃様は、楽しそうです。そんな人が可哀相だとは、僕は、思えないんです」

こんな、答えでいいだろうか、とか。そんなこと忘れてこんなことを、言ってしまったよ。だってそう思ってたんだし、聞かれたんだ

から、いいよね。聞かれたことに答えたただだよ。文句を言うのはお門違いだよ。

今更な弁解を心の中でぎゃあぎゃあ喚きつつ、僕は漸く口を閉じた。じりじりしながらも王妃様を斜め後ろからじつと見つめている、もとい注視していると、あることに気がついた。王妃様の肩が、なんだか震えている。顔も俯きがちで、見ると扇子までも両手で力を込めて握っているのか、白い手袋に皺が寄っている。

思わずぎょつとして言葉を失った。震えるほど怒っているんだろうか。もしくはとんでもなく具合が悪くなっただんだろうか。だとしたら大問題だ。どちらにしても僕の生命の危機に直結しかねない問題だ。

心の中は自己保身一色、失礼を承知でその面差しを覗き込もうと少し身体を傾けたそのとき、一瞬だけ、見えた。ぼたり、と扇子に跳ねて、白い手袋に滲んだもの。一瞬雨か、と上を見上げたけれどもどうもそうではないらしい。それどころかあれだけ降るぞ降るぞと自己主張の激しかった空は、いつのまにか雲が散り散りになり所々に青空が覗き込んでいくくらいだ。

じゃあなんだ。そこまで思い至って漸く僕はある一つの結論にたどり着き、すぐに身体ごと顔を後ろに逆転させた。

こういうとき、どうしたらいいのかわからない。解らないけれどもじろじろ見るのはマナー違反、なような気がした。だから後ろを向いた。ハンカチを差し出せればパーフェクトだったのかもしれないけれど、生憎僕はハンカチを持ち歩くというスキルは未だ習得していない。これから習得できるかどうか自信は無い。大体ハンカチってどこで買うものなのかどうかさえ曖昧だからそれを購入するのとさえ叶わないかもしれない。

ああ、いや、だから落ち着け自分。とにかく、小姓たる僕がすべきことといえばそうだ、これだ。黙って、じつと、主の望むままに。

それから、僕は彼女が泣き止んで僕に声をかけるまでじっと黙ってそこに突っ立っていた。僕の名誉を守るための言い訳を言え、つまり、主のプライベート^①を他者から守っていたんだ、僕は。そうして彼女はお茶を入れなおしましょう、と僕に微笑みかけ、僕はというとそのいつもの微笑みにいつものように思った。

ああ、彼女はやっぱりすらんみたいで。『可哀相』なんて似合わない、って。

ところで、僕は後々ともないこと 例えば彼女が神様に愛された巫女だとかで気分によって天気が右往左往されるというトンデモ超常現象体现の持ち主だということ、だとか王様がそんな彼女を持て余していて扱いを測りかねてこんなことになっている、だとか を知ることになるのだけれど、それはまた、別のお話。

今はとにかくお茶の時間。さて、まずは音を立てずにカップをソーサーに置くことから、習得してみようか。

彼女は今日もすらんみたいに風に揺られ、そんな僕を見ていつものように笑っていた。

王妃様と僕 【異世界トリップ 小姓×王妃】（後書き）

スズラン（鈴蘭、英名：Lily of valley）

別名：君影草^{きみかげそう}、谷間の姫百合^{たにまのひめゆり}

有害物質を含み、特に花や根に多く含まれる。

花言葉……繊細、優雅、純潔、純愛、幸福の訪れ、意識しない美しさ。

参考…… Wikipedia

激烈毒舌乙女、甘いものを拒絶する！ 「異世界トリップ」ファーストキス喪生

つまりは、乙女が初なる接吻においてうつとりする確立は、例えば相手がうつとりものの美形であろうと五分五分ではないのかと、そう言いたいものすごく短い話。勿論続かない。

甘いものはだーい好き。甘いこともだーい好き。

ショートケーキが好き。真っ白なクリームの上にちょこんと乗っかるつやつや苺ちゃんが可愛い。イチゴって、漢字も可愛いよね。響きも可愛い。苺ちゃん見るたんびに、あーあ苺に生まれたかったあ、なんて思うよ。

モンブランもおしゃれでいいよね。ガトーショコラもちよっぴり大人のお姉さんちつくで素敵。シュークリームは子供だよ。でもね、やっぱりみんなだーい好き。

あとね、甘いこともね、沢山好きなものがあるの。恋愛漫画が好きだし、恋愛小説も好きだし、ファンタジーとか、青春ものとか、ほのぼのとか、好きなの。ハッピーエンドがいいよね、やっぱり。

王子様と普通の女の子の恋とか、騎士様に守られるお話とか、もしくはすごい魔法の力で守っちゃう側とか！

お話の中って、だーい好き。どきどき、わくわくがいっぱいできつとね、とってもカラフルなの。きらきらしてて、魔法なんかほんわかわーんって感じで、できないこともありえないこともないって感じ。

だから私、夢のあるお話って大好き。いつだって主人公が羨ましいって、思ってたの。

思っていた、けど。

でもね。

夢は夢の中だから、完璧なのよ。夢から覚めたら、それは可愛げも無い現実ってヤツ。甘くない、リアル。

悲鳴を上げたかったけれど、喉が引きつって出てこなかった。心底吃驚したときって、動けないのね。

ていうか、この場合は違うかな？

がちりホールドされてるっていうか、さあ。

うつうつ、ああ、なんなの、これえ。

「逃げるな」

目が覚めたら、がちりホールドでした。って、なんのプロレス実況ですかこれえええ。

頭の中がしっちゃんかめっちゃか、パニックどころか天地もひっくり返ってあーららこらら、ここはどこ、私は誰？ みたいな。

ていうか、あなた、誰ですか？

「お前の夫だ」

ひいひい良い声してるうつうつ怖いよおお。

訳わかんない、なんで私を捕まえている人が夫なの？ ていうかほんとにここどこ？ なんで私寝てるの？ 上に見えるアレなに？

天蓋？ なんかふわふわしてるし！ ここベッド？

「閨だ。今宵、私とお前は真のつがいとなるのだ」

「つつ、つつ、つつ、つがひ？」

「つがい」

ナニソレなんなのそれ訳わかんないよおお。解りやすく言い直してくれたところで言葉の意味が解らなければ意味が無いよおお。

どんだん、どんだん、頭の中がぐっちゃぐちゃになっていく。ああもうめちゃくちゃだ。何にも解らないの。

どうしてこうなったの？ あなた誰？

怖くなって身体を擦ると、その人の身体が離れる。と、思ったら両手をぐいっと掴まれて、顔の横に固定されちゃった。

「ひい」

情けない声を上げると同時に見上げると、私を見下ろすその人の顔をそのときやっと拝むことが出来た。

よく、見えない、けど。さらさらと流れる、黒いような、紺色の

ような、夜の空色の髪が頬に当たった。その人は外国人みたいで、瞳が青いシルバーみたいに煌いていて、とっても綺麗だった。

というか、顔も綺麗。妖精の王様みたいな、くらくらする美人さん。

て、なんでそんな人が私を見下ろしてるの？

「妖精、か。私にはお前の方が、余程愛らしい妖精に見えるよ」

ふと、眩暈がしそうなほど艶めいた微笑を浮かべて、その人がか
がんできた。甘ったるいことを言って何をするかと戦々恐々として
いると、唇に、柔らかいもの。

なにをされたかなんて、そりゃあ、馬鹿でもわかる。

「いつ」

「い？」

きよとん、と美人さん。

私の心の中は、ずがーん、だあつ。

「いーやーああああー！ 口っ、口くっつけた！ ちゅうした！」

「なんだ。口付けのことか？ つがいなのだ、驚くほどでも」

「おかあさーん！ おーかーあーさああああん！ この人が口くっ
つけた！ 気持ち悪いよおおお！ おかーさーん！ おーかーあ
ーさあーん！」

もーやだ。

なんなの？ なんなのこの人。口くっつけた！ 勝手にちゅうし
た！ なんか生暖かった！

気持ち悪い！ 全然気持ちよくなんて無いじゃんむにゅってして
て気持ち悪いじゃん！ 嘘つき！ なんか一瞬ぴたつと濡れたのが
唇舐めたし！ あれ舌なの？ デイープキスってやつ？

気持ち悪い！ 気持ち悪いよ！ お母さん！ お母さん！

「お、おい、どうした、なんで泣くんだ」

「触らないでよ気持ち悪い！ あたしに触らないで！ どっか行っ
て！ お母さん、おかあさあん！ へっ、へっ、変態！ 部屋に変
態が、変質者がいるの！ 口くっつけたの！ おかーさあああん！

「うわああああんっ」

怖いよう怖いようなんでこんなことになるの。

なんでこんなに叫んでるのにお母さんこないの？ この人勝手にべたべた触ってくるし口くつつけてくるし訳わかんないこと言うし怖いよう。誰か助けてよう。怖いよう。

うあああああん。

なんて、ことを、叫んで泣いて。甘ったるくない、異世界召還初日。

あたしは夫とか言う人を前にして、気持ち悪いを連呼して、気を失うまで思う存分泣き喚いた。

だって、おかしいでしょう？

あんなに、きらきら、ふわふわしてた、砂糖菓子より甘いファーストキスのイメージ。

それがものの見事に、粉碎されちゃったんだもの。どんな乙女だって、悲しくって涙の洪水よ。

その時の私はもう甘いものなんて要らない！ そう思うほど、泣き喚いたんだからね。

夫なんてしらない！ もう恋愛小説も漫画もコリゴリ！ 甘いものなんて、だーい嫌いだった！

激烈毒舌乙女、甘いものを拒絶する！

「異世界トリップ」ファーストキス喪生

口くっつけたて、あーた。

アモルの矛先 【異世界トリップ・BLの橋渡し?】（前書き）

メインではありませんがボーイズラブ要素が含まれますので苦手な方はご注意ください。

アモルの矛先 【異世界トリップ・BLの橋渡し?】

心はどこにあるのだろう。

そんな疑問を浮かべたことはないだろうか。

心臓、脳みそ、果ては頭の上、なんて説もある。私はそれらが情操教育による賜物であって、本来備わっているものではないんじゃないかって、考えている。物を知り見聞を広げ教育を受け数多の感覚を手に入れる。それらの集大成が心なのだと捉える。

それらが何もなければ、心なんて生まれない。無機物と一緒に呼吸をしているかしていないか、生命維持をしているかいないか、ただそれだけの違いしかないんじゃないだろうか。

それならば心の必要性とはなんなのだろう。生きるため？ 生命維持に苦も楽もなければそれを妨げる理由にも促す理由にもならないだろう。心の必要価値は何なのだろう。

その疑問への明確な答えは、いまだ現れない。それともこれは果て無き疑問なのだろうか。それこそ果て無き旅のように私の心が追い求めている。

そうだ。これは心そのもの、私そのものの存在理由を探す、果て無き旅なのだ。

『俺、渋谷が好きなんだ』

突然、彼がそんなことを言った。

そのときの私といえばカップ麺に丁度お湯を注ぎ終え、三分を測っているときだった。

そんな私の傍らで重々しく告白した彼は、何か重大な秘密を晒すように思いつめた表情を晒していた。ロケーションは、部室。他には誰もいない、私と彼の二人っきり。なかなかどうして、告白には適している。

だが私はそんな彼の決死の言葉に対して、言すべき言葉を失っていた。

それはそうだ。彼は男。私は生物学上一応女。そして彼の呼ぶ渋谷は私ではなく、彼の親友。そして私の記憶によれば私は彼の友人というより部活の仲間程度の付き合いでしかなかったし、彼の親友と思わしき渋谷は生物学上確かに、男であった。

静まり返った部室にぼつりと転がったその告白は、悲しいかな、耳を疑いようもなかった。

そうか、あんた、渋谷が好きなのか。

で、何故それを私に言う。

三分経ったか経たないか。恐らくは身を千切る思いでその告白をしただろう彼にとっては、恐ろしく長い時間だっただろう。

けれど不運なことに、彼は望んだ答えを得ることは出来なかった。というか、私が彼に答えることができなかった。二重の意味で。

「我が悲願を成就させよ。我は其の主なり。古のアモルよ、其の矛先にあるのが我が悲願なり。成就させよ。誓願せよ。我が名にかけて。其の魂にかけて。我は其の主なり。心の盟約を刻む同志なり」
「は？」

カップ麺を手にしたまま、軋むパイプ椅子に身を預け、私は飛んだ。果てすら凌駕する、その世界に。

どうやら私は飛んだらしい。飛んだといっても脳みその意味ではないし、なにかやばい薬を一発決めちゃったわけでもない。まあそれも確証がないので憶測から来る断定というか、願望でしかないけれど、どうにも実感が籠もりすぎているため事実を受け入れざるを得ない。

結論から言えばどうやら私は、誰かに呼ばれてしまった、らしい。死んだのかと思えば呼吸も脈も正常だし、寝食共につつがなく過ごしている。異常は感じられない。頭打っちゃってるのかとも考えたけれど、目の前の光景が私の妄想の産物だとしてもいやに精巧すぎて矛盾点が感じられない。その矛盾点すら私の脳みそが強制排除しているから見当たらないだけなのかも、とも思っただけれど、こんな試行錯誤を繰り返すことこそ気が狂いそうだったので早々に事実を受け止めることにした。

真実がどうあれ今目の前で起こっている出来事から逃れようとしても所詮徒勞で終わる。意思が脳に抗うことなど不可能だ。それなら適当なところで折り合いをつけたほうが余程健全というものだ。そうでなければ気が狂う。もしくはもうそうになっていたとしても、妄想の中でまで狂ってしまうのは遠慮したい。せめて自分が正常だと信じるくらいは許されねば、身が持たないというものだ。

さて、その受け入れた事実とやら。まずは始まり。

カップ麺を手にしたまま飛んだ私は腰をかけるパイプ椅子ごとそこに現れた。国名で言うならばアーテュス。王都は都、サリティウスの王城、地下の一室、隠された秘密の部屋。王室と限られたものしか入ることができず其の存在すら秘匿とされている、いわく付の部屋らしい。

真っ暗な石畳に覆われ下は黒い水にひたひたと浸かり、妖しいことこの上ない。円環状に明かりが灯され、その合間を縫うように等間隔で全身黒尽くめの人間達が立っていた。その、私を囲んで。

あのとぎぶつぶつと何かを呟いていたのはその国の皇子であるらしく、私を召還した張本人でもあった。

彼らは私を囲んだまま言葉を交わし、意思と言語が通じることを確認すると、存外丁重にもてなしてくれた。訳もわからず戸惑う私に暖かい食事と寢床、部屋と侍女を与え、不都合など感じようもないほどのサポートを誂えた。そして目まぐるしい展開に私の頭がついていかず困惑している間何をせかすこともなく根気良く接し、また投げ出すこともせず付き合ってくれた。

こうまでされては話を聞かないわけにも行かない。呼ばれ飛ばされ十日経ち、私はことのあらましをその私を呼び出したという皇子、ユスカ・ドル・リルクヴィスト本人から聞いた。

『我が悲願の成就を願う』

どこか遠くを見つめながら、心持思いつめたような眼差しで、彼はそう言った。

彼は私の名を聞かず、私のことをアモルと呼んだ。本当の名前を教えるのは契約を結ぶとき。今のままでは仮契約のままなのだそうだ。アモルとは古の名前であり、象徴なのだと。その名前こそが、彼の悲願を示しているのだ、とも。

「あれですか」

「あれだ」

あれか。

それを見下ろし、息を呑む。思いもかけず、けれど確かな既視感をも覚えるそれを示され、何の因果か、と私は天井を仰ぎたくなかった。

つまり、その悲願は、居たわけだ。見方によればなんてことはない、よくある話なのだと思う。友人に相談する内容としてごく適切だ。強いて言うならば赤の他人、ましてや何の力も持たない一般人

である私に向けるには少々荷がかちすぎている気もしないでもない。それもまた、まあ、見ようによつては少々程度だ。なんだそんなことか、の一言のお釣りすら手向けることができる。

ただ、まあ、その、なんだ。ああ、酷く混乱している。

ここは現実か？ 夢なのか？ もしくは妄想か。過ぎたる問題を突きつけられ私は現実逃避を始めたとも言うのか。現実逃避？

まさか。逃避できてないじゃないか！ むしろ悪化しているだろう！ 非効率にも程がある！ 無能な脳みそめ！

「どうした、アモルよ」

「……いや、ああ。はあ、少し、待ってくれ。少々、気が動転しているみたいだ」

「そのように見える」

「そうなんだ。うん、そうか。そうなんだよ。はあ」

なにやら眩暈さえ起こしかけ、目の前の窓ぶちに手をかけ身体を支えた。ひんやりと手のひらの温度を奪っていくその感触によつてますます頭だけが冴えていき、否応にも今自身に降りかかるすべての事柄が現実から由来しているのだと知らしめてくる。

ああ、忌々しい。なんだと言うのか。これは私への、罰、なのか。あの時彼に応えられなかった私への罰だとしても、言うのだろうか。

「アモルよ」

「……なんだ」

答えるまでのささやかな沈黙には話しかけてくれるな、という無言の抵抗があつたかもしれない。けれどそんなささやかな抵抗に、ましてや地位も権力も名誉も、ましてこの国では権限すら持ち合わせていない私に対する遠慮など、彼は与えてはくれなかった。

それはそのはずだ。彼は私にその悲願の成就を示し、そうしてそれを私が叶えると信じている。いや、真偽の話ですらない。呼び出すことができたのだから、成就も絶対なのだと彼の中で証明されてしまったのだ。だから彼にとって私の存在とは、それを成就させるためだけに在る。それだけなのだろう。

なんとも傲慢で残酷な男だ。そんな男に呼び出された私の恐怖と絶望を、誰が慮ってくれると言うのか。

ああ神よ、私はアモルではありません。それでも彼は私をアモルと呼ぶのです。

ああ神よ。私はアモルなどというものすら知らないというのに、彼は私がアモルたることを信じて止まないのです。両者の矛盾が解消される日は来るのでしょうか。

ああ神よ。私はそれこそそれが成就するか破綻するかしなければ、未来永劫訪れることはないだろうと、そんな気がしてならないのです。

遠く想いを馳せこの理不尽を嘆く振りをして現実逃避を測る私に、しかし皇子は慮ることもなく言った。

「我が愛に試練は必要か」

神妙な顔をして物を言うこの皇子が酷く真面目なのだと言うことも、また始末に終えない。

「……それそのものが試練だとは？」

「さもあらん。言いえて妙だ。流石はアモル」

言ってくれるな。ここから飛び降りて何もかも忘れなくなる。試練とあらばまさに今このときこの皇子を相手にしていることこそ我が最大の試練だろう。難問にも程がある。

「皇子はこの試練を、乗り越えたいと？」

その悲願とやらを絶対に成就させると？

オブラートに包んでそうにかこうにかそれだけ絞り出せた。彼は果敢にも頷いた。

「だからこそアモル、そなたを召喚したまで」

「試練とは己の力で乗り越えてこそとの覚えがあるが」

「恐れを持たぬ御遣いよ。だからこそそなたを呼び出した。故にこそ在る我が手段なのだ」

つまり私の力を借りることも呼び出した自分の實力であると。物の言いようにルールがないからこんなことになる。人類による言論

の規制の緩さの皺寄せが私にきているのではないのか。不公平だ。ため息をつきたい気持ちを抑え、私は再びそれを見下ろした。彼の言う、その悲願を。

「私の意思を打ち負かす気概があるならば神頼みなど無用だろうに」「無論だ。だがこうしてそなたはここにある。ならば為すべきことを為せ。それがアモルの故、性、そして盟約なのだろう」

私はアモルではない。けれどそれを彼は許さない。ならば流れに従いその盟約とやらを果たさねばならない運命にあるのだろう、私は。例えその悲願が　アモルと称される私の人間性、価値観を揺るがすものだったとしても。

その悲願、いやその歌謡いを見下ろし、私は覚悟を決めた。ならばこれもきつと定めなのだ。答えを出せと。応えろと。そういうことだ。

「解った」

傍らに佇む皇子を初めて真正面から見つめる。精悍な面差し、思いつめた眼差しの先に見える揺るがぬ意思、そしてさらにその奥に湛える灯火。私の一息で吹き消すことなど敵わない。ならば風を送り、煽ってやるまでだ。それが燃え尽きるか何かを為すかは、文字通り神のみぞ知る。私はアモル。神の御遣いだ。

「貴方が私を信じる限り、私も手を尽くそう」

「よかるう。この悲願が果てぬ限り、そなたを信じる。……名を」名を告げれば、契約は成立する。そうなればそれが果たされるときまで、帰ることはできない。けれど契約しようがしまいが、結果は同じだろう。恐らくは私が答えを出すまで定めは変わらない。これはきつと私の旅の分岐点でもある。彼に応えることが出来なかった私につきつけられた、試練。私はこの試練を乗り越えなければならぬ。彼のためでも皇子のためでもない、私の為に。

「……乾、灯架」

盟約が刻まれる。私は果たさねばならない。皇子の悲願。狂おしい恋に終着を。

これはある歌謡いに恋焦がれる一人の皇子の物語。私はその導き手。私の名はアモル。アモルとは古の名。それは最古を生きる神の御使い。生きとし生けるものが思い煩う永遠の病を昇華する、天使の名だ。

愛に性差はあるものか。その命題に取り組むべく私は呼ばれた。

皇子は男。

私は女。

彼は男。

渋谷は男。

歌謡いは

男。

疾く応えろアモル。これは愛の命題である。その矛先にかけて応えよ。アモル。

アモルの矛先 「異世界トリップ／BLの橋渡し？」（後書き）

恐らくまるで意味が解らなかつたであろう全閲覧者に向けてと見せかけて技能の無いTmをフォローするためのにちゃん風解説

大学二年生の乾灯架はある日同じ部活に所属する同級生より同性愛をカミングアウトされて『ちょwww』とか思っている間に異世界召還されて『ちょwwwまwww』とか思っている間もなく皇子様に『俺とアイツの仲をアッしてくれ（BL的な意味で）』と言われ『うはwww拒否権無しwwwおkwww』となりました
今ココ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338n/>

やりっぱなし短編集

2011年1月20日20時55分発行